

第三期 赤松政経塾

学び合う仲間に出会い、
人間力・人脈力を
身につけた塾生たち

▼超党派の国会議員・経済人・文化人等が講義

	第一講義	第二講義
第1回 9/17	テーマ： 「民主主義と選挙の本質」 講師：猪口邦子さん 自由民主党 参議院議員	テーマ： 「政治家と映画監督は似ている」 講師：松井久子さん 映画監督
第2回 10/15	テーマ： 「政治は遠くない」 講師：蓮舫さん 民進党 参議院議員	テーマ： 「こころざしを生きる」 講師：永井多恵子さん 公益財団法人せたがや文化財団理事長
第3回 11/19	テーマ： 「100年後の日本のために、 今やるべきことできること」 講師：尾身朝子さん 自由民主党 衆議院議員	テーマ： 「自分の一をプラスした 独自性を心柱に」 講師：中島伸子さん 井村屋グループ(株)専務取締役
第4回	塾長・講師・企画委員の推薦図書を読んで A4 2枚以内の感想レポートを提出。	
第5回	1/20 WIN WIN の開催する新年会	

2016年4月に女性活躍推進法が施行され二年が経ったが、世界的に見て日本の女性議員の割合は、いまだ最下位グループ。世界が目するオリンピック・パラリンピックを迎える2020年には、あらゆる場面のリーダーの30%以上を女性にするという政府の方針があるが、経済界において管理職や役員は徐々に増えてきているとはいっても、国際的に見て、まだまだ低い状況にあり、日本がグローバル化

の時代に遅れをとっている印象は否めない。

政策決定の場に関わる女性政治家や、経済界・学術会・文化スポーツ分野などの重要事項を決定する立場の女性リーダーはまだ不足している。

視野を拡げ、自己を磨き、勇気をもって挑戦しようとする女性たちが学べる場が必要と考えた赤松良子さん（元文部大臣）が、女性リーダー育成のために2014

年9月15日に「赤松政経塾」をスタートさせた。超党派の女性政治家や経済人・活躍中の文化人など、パワフルで魅力的な講師陣の講義とお弁当とワインが用意されたデイスカッションタイムは、塾生たちに多くの気づきをもたらした。年々参加者が増え、議員も誕生し、互いに学び合うネットワークも育ってきた。

2017 新年会

1月20日、四谷の主婦会館プラザエフにおいて、「赤松政経塾」とその母体である「一般財団法人WIN WIN」（超党派で女性を政界に送り込む会・「クオータ制を推進する会」（赤松良子さんのクオータ推進の呼びかけに呼応した女性団体役員会）合同の新年会が開催された。

今年、クオータ制導入を推進する超党派の「政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟」の中川正春会長（衆議院議員）や、副会長の高木美智代さん（衆議院議員）らも駆けつけ、クオータ制推進の活動が超党派の議員の協力を得て実を結びつつあることが語られた。

赤松良子さん「WIN WIN」代表。
「赤松政経塾」塾長▶

三浦まりさん（上智大学法学部教授）▼



▲中川正春さん
（元男女共同参画特命大臣・衆議院議員）



高木美智代さん（衆議院議員）▶

◆2017年2月18日講義より

「顔合わせ・心合わせ・力合わせ」を大切に、 人のための社会を創りたい。

リポーターとして社会の底辺の現実を見たからこそ良い政治が必要だと考えた徳永さん。フル回転で働き一人で息子を育ててきた人生から、息子に背中を押されて国会議員に。人の心を打つ身の丈で語る自然体のことばが共感を呼んでいる。

参議院議員 徳永エリさん



【プロフィール】北海道札幌市生まれ。法政大学法学部中退。テレビリポーター・飲食店経営・映像制作会社経営を経て参議院議員に。2010年～参議院2回当選。参議院民主党・新緑風会／副幹事長、企業団体対策委員会／副委員長を歴任、現在党ネクスト農林水産副大臣、民進党北海道総支部連合会代表代行。

世の中の現実を見て 心配になった

今日のテーマは「顔合わせ・心合わせ・力合わせ」です。先輩の東参議院議員に初めてお会いした時に聞いたことばで、これがいかに大事かということを目の当たりに伝えたいと思います。

私が東京でTVリポーターとして働いていた頃、昭和の最後の時代、歴史に残るような出来事が多くありました。ロス疑惑、御巢鷹山日航機墜落事故、芸能界では石原裕次郎さんや美空ひばりさんといったスターが次々と亡くなっていました。様々な社会問題も起きていて、その取材を通して、世の中の現実と向き合ってきました。

経済の低迷で、格差の問題が大きくなり、貧困状態に陥る子供が増えて来て学校では朝ごはんや夕食が食べられず給食だけが食事になっている子供、保健室で、水の中にグラニュー糖を溶かして飲んでから授業に出る子供がいました。日本の6人に1人の子供が貧困にある中で、北海道では5人に1人でした。家の事情で高校に行けない子や学費が払えず中退する子がいて北海道の深刻な状況がありました。北

海道拓殖銀行の破綻で、中小企業は融資が受けられず倒産が相次ぎ、お父さんに仕事がなく家計が苦しいという子供たちの実情を取材しました。ルーズソックス、山姥ギャルの時代です。経済的事情で、学校に行けない10代の子供たちも沢山いて、社会的リテラシーが身に付かず、アルバイトをしようにも履歴書の書き方もわからず、面接での対応もできない。キャバクラでの1日体験、暴力団が粗悪品を売りつけるためのテレホンアポインターでお小遣い稼ぎ。出会い系サイトを利用しての、売買春やMDMA（錠剤型覚せい剤）の入手、性被害にあっても警察に被害届の出し方すらわからない。こんな状況でこの子たちの将来はどうなってしまうのだろうと本当に心配でした。

ひとり親家庭の子供の 将来を考えた

私もひとり親家庭で子育てをしましたが、この問題を何とかしたいといけなく、政治を変えてもらわなければ、民主党の支援をずっと続けていきました。ですから民主党が政権をとった時の鳩山さんの国会演説には感動しました。やさしさや希望にあふれていて、障害のあ

る人たちが、社会的弱者も、社会を変えていく一員になれるのだと勇気を与えられるものでした。インターネットに掲載されていますからぜひ見ていただきたい。

出会い系サイトの取材では、介護職の人たちの報酬が少なく、出会い系サイトの仕事とダブルワークする時間もない、追い詰められて出会い系サイトを利用して、生活費を得なければならぬ人がいて驚きました。「こんなことがあつてはいけない女性の尊厳が守られる社会にしなければならぬ。オトナの社会も変えていかなくては」と思いました。

30年間テレビの仕事をしてきた私ですが、契約のフリーランスでの仕事でした。交通事故に遭ったり、病気をしたらもう仕事はもらえなくなる。ひとり親家庭ですから仕事を休むわけにはいかないと、子供を保育園へ預けながらの仕事でした。子供を迎えに行く6時に間に合わなくて、当時は公衆電話で必死に知人に迎えに行くのを頼んだり、そんな時多くの人に助けてもらいました。朝4時から取材もあります。ベビーシッターに払うお金も高額です。テレビの仕事だけ

では生活をしていけないので、預金を全部を叩いて飲食店を開き自ら調理をし、16年経営してきました。1日3時間しか寝ないことも少なくありませんでした。一人で子供を育てていくのは本当に大変でした。

お鍋を持つエプロン姿の私にフラッシュが

2010年、息子が春に、無事大学に合格したら、TVリポーターの仕事は辞めて、飲食店経営に専念しようと考えていた矢先、以前からお世話になっていた民主党北海道の幹事長から、お手紙をいただきました。「今年の参議院選挙に出てほしい」という内容でした。民主党が候補者探しに苦労していることは聞いていましたので、いろいろな人に声をかけているのだろうと軽い気持ちで受け止めていたところ、次々と民主党の関係者から呼ばれ、説得が続きました。お断りをし続けていたある日、お店で余った料理の入った鍋を抱え、エプロン姿で帰宅したら、自宅の前に沢山のタクシーが停まっていた。私の姿を見つけると、新聞記者やらTVクルーが大勢車から降りてきて「参議院選挙に出馬は決めたのですか?」と取り囲まれました。躲

して家に入ったのですが、新聞に書かれ、ニュースに流れ、外堀を埋められたような形になり、その後の対応は大変でした。

支援団体もなく出馬したが「想い」を伝え、見事当選!

いよいよ、結論を出さなければならぬ時が来て、息子に相談をする。「今までいろんなことがあったけど、二人で乗り越えてきたよね。僕は受験、お母さんは選挙、お互い頑張ろう」「でも、受験に影響したら、大変だし」と私。「失礼な!僕は受験に失敗することなんて考えていないから」と。そうしたら不思議に勇気が湧いてきて「挑戦してみよう。頑張ろう!」という気になりました。12支部ある北海道の定期党大会に初めて出た時に、ある人から「徳永さんこんな選挙はやめてしまいなさい。もう一人の民主党から出馬する人は労働組合がついてい

る。なんの組織もつかないで選挙運動をしても勝てないよ」といわれました。支援団体がつかないと当選できるものではないことなど全く知らなかったのです。6年に1回しかやってこない参院選、勝てない選挙ならば、11日間の選挙戦、全道を回る中で、これまで社会問題を多く取材してきた自分の思いを精一杯伝えるしかないと思いました。北海道は日本の国土の22%もあります。トラックに乗って1日26回の街頭演説をして700キロを走るという過酷な活動でした。帯広・札幌・旭川へと片道4時間から8時間かけての移動するなど、走り廻りました。

私自身も、地方の町が抱えている課題を改めて知る機会にもなりましたし、その現状を伝え、課題の解決に向かって市民目線で頑張りたいとたくさんの方の温かい応援をいただきました。

党内のコミュニケーションが重要な時期に

現在の民進党は40代から50代の大臣・副大臣の経験を持つ人が競い合い、自己主張のある人が多く、党内で二つの法案について議論すると何時間もかけてぶつかり合うことが多い。最後までの決定プロセスで、いろんな根回しが必要だと思いが、少数で丁寧な話し作業も必要だと思ふ。しかし「ちよと飲みに行こう」の声もなかなか出ない。以前はちよとラーメンでも食べに行こうというような配慮もあったが、

人数も少なくなり、みんなますます忙しくなると、それも難しくなってきた。蓮舫代表も、シャープで素晴らしい議員だと思いますが、もつと仲間と触れ合って欲しいと思います。代表として、責任が重く辛いことも悩みもあると思います。最近、とても痩せて心配です。仲間

間に弱いところを見せてもいいの

と思います。女性の議員の仲間もいるのですから「心合わせ、力合わせ」をすればもつと楽になれるかもしれない。

前原さんは、JR北海道の赤字による存続問題を心配して、JR北海道の社長と会って「何とか頑張ってもらいたい」という話をしている。それなのに北海道選出の私たちにそれを伝えてもらっていない。党内の誰がどこで何をしているのか、かわりにくい。「心を合わせる」コミュニケーションが必要だと思ふ。中小企業には消費税の理解を求め、ちゃんと説明していかなければいけないと思ふ。私も商売をしていたからその大切さがわかります。マスコミにもちゃんと伝え、また伝えてもらうように働きかけなければと思います。

蓮舫さんへの期待は「刷新」だったと思う。執行部に女性や若い人を起用してもらって、今までの民主党とは違う新しい政党になることを期待してもらっていたと思うが、男性の議員の数が多く、政権時代の経験のある人たちは党の中心で仕事をしたいということになり、執行部メンバーの顔触れが変わらない。特定秘密保護法・集団的自衛権の問題・南スーダン派遣・安全保障の問題など、きな臭い話に関心が向かう。女性の議員が党内に増えれば、党内の雰囲気も随分と変わるのではないだろうか? 命や平和を守る観点からもつと違った議論ができると思います。

政治家の仕事は色々ありますが、私は今、街頭に立つことが大切だと思っています。直接、地域の皆さんと顔を合わせて、国会でのこと、自分の考えを伝え、共に考え行動していく、その環境を作っていくかなければ、日本の政治は変わらないと思っています。



◆2017年3月18日講義より

女性の視点を活かし 困っている人に 支援の手が届く社会を

女性国会議員で唯一の公認会計士である強みを活かし、国や行政の財政を見える化・適性化。無駄をなくし、必要な人に必要な支援が届く社会を目指す、竹谷とし子さんの政策について聞いた。

参議院議員 竹谷とし子さん



【プロフィール】 東京の創価高校、創価大学に進学し、公認会計士試験に現役合格。監査法人を経て、経営コンサルティング会社の執行役員として企業の経営改善の仕事に従事。2010年の参院選（東京選挙区）で初当選。財務大臣政務官のほか参院災害対策特別委員長などを歴任。2016年7月の参院選（東京選挙区）で再選。

お金の管理の大切さを 実を持って知った子ども時代

北海道標津町という小さな町に生まれました。酪農と漁業の町で、両親は水産加工工場を営んでいました。羽振りのいい時代もありましたが、200海里問題によって水産業は大打撃を受け、両親も工場を閉じなければならなくなりました。母が日々家計簿をつけ「私は、学はないが子どもたちを学校に行かせ、しっかり食べさせることだけ考えてきた」と言っていたこと、「調子のいいときにきちんと貯金をし、日々帳簿をつけて管理していれば」と悔やんでいたことを今でも覚えています。それが、公認会計士を目指した遠因かもしれません。

財政の無駄を削減する 具体的な方法を提言

公認会計士として監査法人や経営コンサルティング会社で17年ほど働いてきましたが、勧めてくださる方があり、2010年の参院選で東京選挙区から立候補し初当選いたしました。

女性国会議員で唯一の公認会計士という自身の特性を活かし、女性の視点で2つの無駄の削減に取り組んできました。

「これは財政の無駄の削減です。」「無駄を削減する」というと反対する人はだれもいませんが、これまで削減の方法を具体的に提案できる人はいませんでした。

私は、国家財政の帳簿をつぶさに調べ、「非常時に備えた国債整理基金の残高10兆円と、それを借りるのにかかる年間1000億円以上の利息」を見つけました。

国会質問で「本当に必要な場合は、日銀から借りればいい」と提案し、その後も財務官僚と膝詰めの協議を繰り返した結果、10兆円から3兆円への基金の取り崩しが決定。これによって年間700億円の利息の削減ができました。

年間700億と言えば、一日にしたら約2億円です。会計帳簿から無駄を見つけ誰の痛みを伴うことなく削減することができました。

もう一つ、地方自治体の会計方式を、従来の単式簿記から、一般企業がしているように複式簿記（発主主義会計）に変え、お金、つまりは皆さんからの税金の使い方を誰が見てもわかるようにすることを提案しました。これは、来年度から実施が決まっています。

何にいくらかかっているか 知ることで意識が変わる

国の予算は地方自治体よりも規模が大きいの「筋縄ではいきませんが、私たちの税金が何にどれだけ使われているのか、行政サービスのうち27年度は24、28年度は41事業について見える化することに取り組みしました。

たとえば、刑務所を運営するためにどれだけかかっているのか。約3000億と言われても我々庶民にはピンときません。そこで、収容者一人につき1日あたりいくらかかっているかを計算しました。すると、1万2千円以上かかっていることがわかりました。特別養護老人ホームに入所している要介護4の人にかかる金額とはほぼ同じくらいです。

これを減らすためには、犯罪を生みださないこと。そのために税を使う必要がある。最近、刑務所から出所しても社会に受け入れられず、経済的に困窮して再犯し再び刑務所にもどってくるという方が増えています。それを防ぐためには保護司（犯罪を犯した人の更生や社会復帰の支援を無給で行う人）を支えていく必要がある。一

これまで

2013年度～

利払い費は 年間1000億円以上

災害などで国債が発行できない緊急時に対応するため積み立て

借金で積み立てた基金10兆円

利払い費を 700億円削減

緊急時は日銀が政府に資金を貸付。多額の基金は不要に

基金を3兆円に取り崩し

◀ 国債整理基金の利払い費700億円の削減を可能にした。

時にお金がかかったとしても、これで犯罪者が少なくなれば、結局は刑務所運営にかかる経費を削減することが出来ます。

このように、「何にいくらかかっているのか」を見える化することで予算審議の在り方も変わっていくと思っています。

大量の食品が捨てられる一方 食べ物がいない子どもたちが

私が取り組んでいるもう一つの無駄の削減は「食品ロス」削減です。日本では、年間632万トンの食品がまだ食べられるのに廃棄されています。これは1日一人あたりおにぎり1〜2個分、あるいは魚介類の1年間の生産高に匹敵します。一般家庭から半分、残り半分は企業から出ています。たいへんもったいないことです。

一方で、今日日本の子どもたちは6人に1人が貧困状態にあります。学校給食が頼りで、学校のない夏休みには家で十分な食事をすることができない。

この問題を解決するために、プロジェクトチームを立上げ総理大臣に提言を行いました。大きな改革のためには法律が必要です。たとえば、フランスでは昨年、大きなスー

パーでは食品を廃棄せずにフードバンクなどに提供し、そこから困っている人に分配するという法律が作られました。

日本では、セカンドハーベスト・ジャパンという団体が日本初のフードバンクとして、廃棄される食品を引き取り、児童養護施設の子どもたちやDV被害者などのためのシェルター、路上生活者などに届ける活動を行っています。これを運営するためにはコストがかかりますが、国が支援する仕組みがなく、企業からの寄付でまかなっているそうです。日本全体として、まだ人手が足りず、倉庫も足りないため配りきれない。また、支援を必要としている人がどこにいるのか情報を把握できないため、必要な人に届いて



▲食品ロス削減を呼びかける啓発イベントに参加する竹谷さん

いないという問題もあります。法律を作ることで、この問題の解決を進めていこうと取り組んでいるところです。

だれもが祝福され 幸せに生きられる社会へ

女性の立場から、産前産後ケアにも取り組んでいます。都会では、核家族化や男性の長時間労働などにより、女性一人で慣れない育児をしなければならず、これが産後うつや、幼児虐待などの問題を引き起こしています。多くの女性と同じ悩みを抱えながら、どこに相談したらいいかわからないのが現状です。

世田谷区ではこれを大きな問題だととらえ、産後ケアセンターを建てました。フィンランドには、ネウボラという、育児支援サービスがあります。この全国普及に取り組んでいます。また、性犯罪の被害にあった女性のためのワンストップ相談センターを全国の都道府県で作れるよう来年度の予算に計上しています。

産前産後ケアによって 子どもの虐待の防止へ

さまざまな理由で望



まない妊娠をし、出産された場合も、生まれてきた命には何の責任もありません。すべての命が祝福され、だれもが幸せに生きる権利を行使していける社会をつくってきたい。それが私の政治家としての想いです。

だれもが食べ物に困ることなく、個性を活かして働き生きていく術を身につけるための教育をきちんと受けられる社会。そのために給付型の奨学金の創設にも撮り組んでいます。

女性だからこその女性の苦しみ、命をなにより大切にしている気持ちは党派に関係ありません。女性が団結して取り組める政策だと思っています。他の議員とも協力して前に進めて行きたいと思っています。

◆2017年3月18日講義より

2016年に行われた アメリカ大統領選の 総括とトランプの今後

1984～89年にNYに滞在し、ロナルド・レーガン、ジョージ・H・W・ブッシュ、2度の大統領選を見てきた岸本裕紀子さん。『ヒラリー』（PHP研究所）などの著書があり、ヒラリー・クリントンのファンだという岸本さんは、昨年末のアメリカ大統領選をどう見たのか。トランプ政権の今度はどう見ているのか。

エッセイスト、政治コラムニスト 岸本裕紀子さん

【プロフィール】 1953年生まれ。東京都出身。慶応義塾大学法学部卒業後、女性誌編集部勤務を経て渡米。NY大学行政大学院修士課程修了。著書『ヒラリーとライス アメリカを動かす女たちの素顔』（PHP新書）、『ヒラリー』（PHP研究所）、『定年女子 これからの仕事、生活、やりたいこと』（集英社学芸単行本）など多数。



「信じることをやめないで」
ヒラリーは負けても強かった

1992年、アメリカから帰国後のある日、テレビをつけるとアメリカの大統領選予備選で堂々とスピーチをする女性の姿が目飛び込んできました。セミロングのボブヘアにヘアバンドをしたその人は若き日のヒラリーでした。そのときからヒラリーに興味を持ち、調べてきました。

1988年のアメリカの大統領選で、ジョージ・H・W・ブッシュが勝ち、敗れたマイケル・デュカキスの妻はショックでダイエットピル（やせ薬）の依存症になったというニュースがありました。立候補者の妻ですらそんなのだから、ヒラリー本人もさぞかし落ち込んでいたろうと心配していました。しかし、敗北が決まった翌日、ヒラリーが若い人たちに向けて「決して、信じることをやめないでください。正しいことのために戦うことは、価値のあることです」と語った敗戦の弁は実に素晴らしいものでした。そのスピーチは、本当にヒラリーらしいもので、こういう自分らしいやり方で闘えば、あるいは違う結果になったのではないかとちらりと思いました。

ヒラリーは
なぜ負けたのか

2016年の大統領選は異例づくめでした。世論調査ではヒラリーが圧倒的に優勢でした。3回のテレビ討論会ですべてヒラリーが勝利し、メディアや有名人らも95%がヒラリーを支持していました。資金力、組織力においても民主党が共和党を上回っていました。それでも負けてしまった。なぜでしょうか。

考えてみると、不思議なことがいくつかありました。これまでの大統領選で、たつたつの失言で失脚した候補者はたくさんいましたが、トランプは罵詈雑言やスキャンダルを連発していたにもかかわらず人気は衰えませんでした。また、共和党ではルビオという40代の若い候補者がいました。彼はキューバ移民の子でバーテンダーの父とウエイトレスの母に育てられた苦勞人です。以前のアメリカ人は、ルビオのような、正にアメリカンドリームといった人物に対し好意的でした。ところがなぜか今回は冷ややかな空気が流れていた。このような異例づくめの中でヒラリーは闘わなければなりません。また、スタートから有権者たち

の間には「ヒラリーはうそつきで信頼できず、傲慢で冷たい女」というイメージが定着していることを感じました。長くヒラリーについて調べてきた私は、実像とは全く違うと感じましたが、それは共和党による長年のイメージ戦略によるもので、それを払拭できなかったことは残念だと思います。

ヒラリーはまだアーカンソーの小さな町で弁護士をしていたときから、DV防止センターを立ち上げるなど、女性の人権のために戦ってきた人ですが、今の若い人たちはそれを知りません。それも彼女にとっては残念であり悔しかったのではないのでしょうか。

もし、副大統領候補が
サンダースだったら

ヒラリーの選挙戦は、小さなカフェでテーブルを囲みながら有権者の声を聴くといったところから始まりました。ところが民主党の戦略もあり、最終的には有名スターが勢ぞろいして、何万人もの観衆の前でスピーチをする、そこへこぶしを振り上げてヒラリーが登場するといった過剰な演出をするようになった。これがヒラリーの「庶民からかけ離れたエスタブリッシュメント」というイ

メージを増長させてしまった。

しかし、最大のミスは、副大統領候補にサンダースではなく、ティム・ケインを選んだことだったのではないだろうか。若者の熱狂的な支持を得ていたサンダースをはずしたこと、がっかりした有権者たちの多くがトランプに投票したり、棄権したのではないかと思います。もし、サンダースが副大統領候補であつたら、結果は違ったのかもしれない。

アメリカ社会を覆う「ぶっ壊せ」というムード

これまで述べてきた小さなことが重なつて、ヒラリーの敗北へとつながつた。しかし、実はそれよりももっと大きな、アメリカ社会のうねりが、ヒラリーを敗北へと導いたのではと思つています。

最も大きかつたのは、仕事を奪われた白人労働者の怒りです。従来、民主党の主な支持層は、大きくは3つ。一つは都会に住む高学歴なリベラル派の人たち、もう一つが、有色人種の貧困層、そして、アメリカ中西部の労働組合員たちです。今回は、工場で働いていたこの組合員たちがトランプ支持に流れていった。私がNYにいた1980年代、自動車産業や鉄鉱業などに従事する白

人は600〜800万円の年収があり、家を買ひ、子どもたちを大学に行かせ、バカンスを取ることもできていた。そういう人たちの仕事はどんどんなくなつていき、今では時給10ドルのサービス業くらいしかない。これに対し政治は何もしてこない、将来の展望が持てないという怒り、不安、不満が、どうとトランプ支持へと回つたのです。

白人の工場労働者の仕事がなくなつたのは、海外への工場移転や、移民が増えたせいだけではありません。人間の仕事の多くがAIやITに取つて替わられたことが主な理由です。おそらくそんなことは、当事者だつてわかっている。それでも、政治家に対して怒りをぶつけないのは気がすまなかつた。政治家はエスタブリッシュメントとヒラリーVS.トランプという構図の中で、トランプなら自分たちの気持ちをかつかくれる、と多くの有権者は考えたでしょう。

アメリカは、常に新しいことにチャレンジし、ポジティブシンキングの国でした。人々はアメリカンドリームを信じていました。でも、いつもポジティブでいるのは疲れる。それよりは雇用問題をなんとかして、お

題目はたくさんだ、今までの体制を「ぶっ壊してくれ」。これが有権者たちの本音だつたのでしょう。

ヒラリーは正しいことを言つてきましたが、こうした有権者の気持ちを見極めることができなかった。トランプは口からでまかせもたくさん言つたが、有権者の心に響くものがあった。それが、ヒラリーとトランプの明暗を分けたところであり、今回の大統領選の総括ではないでしょうか。

トランプ政権はどこに向かうのか※

トランプ政権が発足して2カ月が経ちました。これからトランプ政権はどうなっていくのか、今、世界中が注目しています。

世界秩序よりもアメリカファースト。オバマケア(医療保険制度改革)の廃止、メキシコ国境に壁、中東・アフリカの国々からの入国禁止、大幅減税など、どれをとっても実現は難しそうです。

よい政策もあります。アメリカは先進国で唯一、有給の産休育休がない国ですが、トランプ政権のもと、これが実現するかもしれません。また、インフラ整備に1兆ドルの投資をすると言っています。ア

メリカは早くに発展したため、ダムや道路、トンネル、水道管、空港、鉄道……あらゆるものが老朽化しています。トランプは建築・不動産ビジネスをしていましたからインフラ整備は得意分野でしょう。こういうところで力を発揮してほしいと思います。

また、トランプはもとはビジネスマンですから、損得で物事を考えるところがあります。ヒラリーは「独裁者から人民の自由を守る」という理念から戦争に進む可能性もありましたが、トランプ流で言えば、「戦争は損だ」ということになる。トランプは国防費を10%増額すると言っていますが、好戦的ではないかもしれない。これはつ明らかな話かもしれません。

トランプは、今後どのような大統領になつていくのでしょうか。今の過激な言動がトーンダウンして、官僚の言いなりに動く、特色のない大統領になるのかもしれませんが。あるいは、このまま暴走し続けるのかも知れません。予測不可能です。

トランプは選挙中にロシアから財政的な援助を受けていた、あるいは何か密約を交わしていたと疑う声があり、現在FBIによる調査が

進んでいます。もし、証拠が出てきたら、弾劾の可能性もあります。弾劾があるとしたら、中間選挙以降になるでしょう。

大統領選は、民主主義の素晴らしさを再認識する機会

今回のトランプの当選で考えたことがあります。それは、これまで真面目に働いてきた普通の人が、以前のような生活を維持できなくなつてきたこと。これは世界の趨勢ですが、これらの人たちがこれからどうするのか。彼らの声を国が受け止めて経済を底上げできないと、政治はますます右傾化していくであろうということ。あるいは独裁者のような人が出てくる危険があるのではないかと。一つのこと。

アメリカの大統領は4年に1度、約2年間の長い闘いですが、私たちは大統領選のおかげで、4年ごとに、立候補者たちのスピーチを聞き、自由、民主主義、法の下での平等、多様な価値観を尊重することの素晴らしさを再認識することが出来ます。それはとても良いことだと思います。今回の大統領選での、「ぶっ壊せ」というムードが、民主主義や、自由平等すらないがしろにしようとするものではないことを切に祈ります。

赤松政経塾 参加者の声



税金と 政治の関係を 改めて学んだ

フローラ税理士法人
税理士

若山昌美さん

税理士として法人や個人の納税のお手伝いをしています。政治と税務は切っても切り離せない関係にありますが、今までは税制改正関係以外で政治の話題にはほとんど興味はありませんでした。政治は、国民から集めたお金をどのように使うか、どのように分配するかを国民の代表として決定していく機能があります。納税だけではなく、その使途こそが重要なのだと、塾に参加して改めて学びました。また、税理士として、国民にとってより良い税制となるよう微力ながら尽力したいと思います。

役に立つ役人を 目指して 一日一日を大切に

地方公務員
保健師

石川貴美子さん

目まぐるしく変化する世の中の動きの中で、市の保健師としてできること、すべきことは何か。目の前の仕事に追われ、つい目的を見失いそうになります。一本筋が通った赤松先生をはじめ、様々な分野で活躍されている講師のお話、塾生の皆さんとの交流は、エネルギーでまさに感動そのもの。歴史、世界、将来を考え、新たなネットワークを広げていきたい。素敵な出会いをいただけたことに感謝しています。誰もが健康で健やかに、幸せに暮らせるよう、一日二日の過ごし方を大切にしていきたいと思っています。



読む本や休日の 生活が 一変しました

日本航空株式会社
人事部

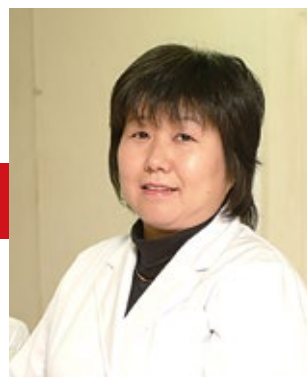
久芳珠子さん

会社更生の経験、社内における女性活躍推進のゼロからの立ち上げ、働き方改革の推進などを経験し、日本全体の社会問題解決を担い牽引する実力を身に付けたいと強く思い、参加しました。講師の方々のお話に感化され、手に取る本が変わり、休日には世田谷パブリックシアターで演劇を観るようになりました。また赤松先生の隣でワインとお弁当をご一緒した1時間で、すっかり先生のファンになりました。スケールの大きさ、包容力、ユーモアと全てにおいて桁違い。まさにリーダーとしての理想を見たと思います。

女性の社会進出と 健康を支援したい

志村デンタルクリニック副院長
歯科医師

志村真理子さん



女性ホルモンと歯周病やドライマウスを中心に、女性特有にみられる口の問題をライフワークにしています。赤松先生、講師の方々の教えはもちろんのこと、塾生同士のディスカッションからも、貴重なお話をたくさん拝聴し、毎回感銘をうけています。女性の働く環境、少子化問題、女性の健康の包括的支援などは、女性議員数を増やし、女性の生の声を反映した法案をどんどん誕生させなければならぬことを痛感しました。様々な角度から女性の社会進出、健康を支援できるようにしたいと思っています。